青髭１０

明宏訊

　人を小馬鹿にしたようなジャックの笑声は扉の向こうから聞こえてきたのではない。天井から降ってきた。アンリが気配を感じたころには、天井近くの梁に腰かけていたのである。
「行儀の悪い」
　部屋の片隅で優雅な姿勢で腰かけている伯爵のそれは、窘めるというよりはむしろ習慣からくる呼吸に近い。主君が家臣を叱るというニュアンスではまるでない。
ちょうど枕詞のようでほとんど意味をなさない。アンヌはまるで人形のように存在している。こういってはなんだが、そこにあると表現した方がより適当とさえおもえる。だから、光の加減からか、微笑したようにみえたのはアンリの錯覚かもしれない。

　この少年の体内に巡っている血の色が青いことはもはや明白である。赤い血の平民がこのような芸当が可能とはとても思われない。そして、驚くべきことにピンからキリまである貴族の中でもかなりの濃い、上位だと思わずにはいられなかった。ただし、知性の方が素質に追いついていないようだ。青年が彼の年齢のころには、その言葉をふつうの人間が
　常用していたとはおもえないほどに複雑な古代語の文法におとなしく噛り付いていたものだ。彼の記憶の中にはそんな自分しか棲んでいない。
　その少年は、最初に出会ったときは打って変わって見下した表情を浮かべている。彼の能力はいかほどなのか実地で確かめてみたくなったが、さすがに大人気ない。だが、たしかにアンリにいっさい気付かせずにあの場所まで駆け上がった能力には関心させられる。おそらく、彼の血が赤かったのは、とくべつな薬品が魔法のおかげであることは議論を待たない。伯爵が言っていたハムラビとかいうオリエント人に調合か開発させた術なのだろう。しかし、どうしてそんなことを？
　青い血は青い血で知るのが一番だ。大人気ないと考えたが、青年は、長いこと本来の能力を隠匿してきたストレスも手伝って、その制御に細心の注意を払いながら、炉に炎を放り込んだのである。
　アンリは、手を組んだままで少しばかり中空に身を浮かせた。途端に、少年は青ざめた。そして、伯爵の方向を伺った。しかし、主君は見てみふりを決め込まんと椅子に腰かける。かなり古いのだろう。ぎりぎりと嫌な音がした。
　驚くべきことにアンヌが口を開いたのである。それも鼻にかかった、いささか情感が込められていた声である。おそらく、普段の彼女を知らない人間ならば全くの無表情にしか見えないだろう。
「よ、よろしいのですか？彼はともかく、アンリさまは事情をご存じないために制御しえないとおもいますが」
　この女は、いや、彼女は、それでも大学で教授が講義するような言い方になってしまう。いいや、そのような理性的な分析をしている場合ではない。アンリは怒るべきなのだ、なんとなれば、少年よりも彼の方が理性の制御という点において劣ると断言したようなものなのだから。

　だが、素直に感情的になることができないのはどういうことか。この部屋を支配する異常な空気は、アンリの文学的な素養からいって表現不可能だ。伯爵の、あたかもこの時空から隠遁したような態度、そして、アンヌの、普段の彼女からすれば情感がにじみ出た態度、そして、あの少年の、泡を食った態度、それらすべてを解析できる計算式はこの世に存在するのだろうか？
　考える以前に、青年は少年が存在する高さまで空間移動を果たしていた。
「アンリ、ジャック、いい加減にしないか」
　事ここに至って、熱くなりかけた鉄を冷ましたのは伯爵の低い声だった。客観的にみて、その声はまったく威圧的でなかったにもかかわらず、少年は主君のところまで降りて行って膝をついた。
「閣下、申し訳ありません･･･」
　丁重ではあるが、かつて、中庭でバラの世話をしていたときの彼とはまったく態度が違う。あのときは、奴隷の主人に対する態度そのものだったが、今回は、まさに主君に対する忠臣のそれだった。
　さすがに伯爵も、今度ばかりは真剣な顔をしていた。
「状況を理解していないお前でもあるまいに･･」
「このお方の、あまりにも頭の悪さについ手が出てしまいました」
「な･･？！」
　さすがに１０歳の少年にこうまで言われてはアンリも鼻白まざるを得ない。
　仕方なく、アンリも降りていく。
　しかし、彼に対しては主君は温和だった。
「そなたには何も知らせていない･･･だが、王都も経験したそなたなれば、経験から少しは察してもいいのではないか？」
「･････････････」
　残念ながら伯爵が何を言わんとしているのか摑みかねた。改めて三人の顔をかんがみるに、青年は不思議な気持ちが起こってくるのを禁じることができない。なにやら、一芝居打たれているような気がするのだ。彼らは知っていて、自分は知らないことが多すぎる。それは当然のことだ。だが、あまりにももったいぶった態度から、部外者である自分の立場を意識せざるをえない。
　もしかして、自分を試しているのだろうか？
　日差しの角度からすでに昼近くになっていることが知れる。ひょんなことから重大なことを思いついた。
「あの下働きの者どもも青い血の持ち主なのですか？」
　時間が時間なので、女官たちが部屋の外に控えてアンヌの意を探ろうとしていた。
「当然だ。しかるべき家の娘たちだ、アンリ」
　主君の言葉はとうてい信じられない。どのような理由で、彼女たちがこのような卑賤な仕事に従事することができるというのか？いかに相手がいかにやむごとなき相手であっても、たとい、ピエール４世が君臨する宮廷であっても、下働きのものは下働きのものであって、その体内には卑しい赤い血がめぐっているのだ。

広大な王の宮殿と違ってギョイエンヌ従子爵家ていどの貴族の屋敷ならば、赤い血を排除することが可能である。そうはいっても下働きのものが必須だが、できるだけ他家に比較すれば交流のない環境で育った故に王都ナルボンヌ、いや、領地から出奔してからの、カルチャーショックは筆舌に尽くしがたいものがあった。
何しろ、極論をいえば、能力はともかく精神的には両者は同価値というのが、アンリにいわせればゴロツキ以下という、啓蒙主義者たちの主張である。富貴に恵まれた大貴族たちにもこの手の思想にかぶれた若者たちがいて、平民たちの一群に人工的に貴族の生活を経験させ、はたして、自分たちに匹敵する高度な精神を獲得できるのか、などと広大な土地を使って実験する馬鹿者たちまで現れた次第である。ブーリエンヌ女伯爵が客として招聘していたさる公爵閣下のはなしを、アンリも聞いていたのである。
昨今の若者らしく自由や啓蒙主義に憧れて故郷を出奔したアンリ少年だが、実地で体験するにつれて嫌気がさした。
赤い血を経験するために、平民としてブーリエンヌ女伯爵の屋敷に飛び込んだのである。理想と実体験が彼岸と此岸ほどの距離がある良い例証だろう。

少年は、はたして、軽蔑しているのか、それとも敬っているのか、両者が曖昧になった視線をアンリに向けている。向けられた方にしても、彼を敬うべきなのか、あるいは、同位のなかで年下に対するような遇し方をすべきなのか、完全に判断に迷ってしまっている。アンヌの実家のような巨大な名前を出されてしまえば、こちらが平伏せざるをえないのだ。まして、王家の血が流れているとなれば、非礼に対しては死を以ても償いきれないであろう。
この状況下にあって唯一正鵠を射る表現は次のようなものだろう。すなわち、２０代も後半にさしかかったアンリは、１０歳ぐらいの少年ジャックに完全に手玉に取られている。
アンリは屈辱のあまり身動きが取れなくなっていた。それは魔術によらない魔法のようなものだが、それを解いたのは、主君の声だった。
「おお、ついにやってきたか、ハムラビ」